

改元で、東京オリンピックで、 日本はどう変わる？ 高知はどう変わる？

講師：哲学者 内山 節

2018年3月1日(木) 18:00～20:00
高知県人権啓発センター「6階ホール」



公益社団法人 高知県自治研究センター

改元で、東京オリンピックで、 日本はどう変わる？ 高知はどう変わる？

2018/3/1・高知

1. はじめに

- 改元で何かが変わるか、オリンピックで何かが変わるか
- 国家と国民に共通課題があるように感じる時代は終わりかけてはいないか

2. 「昭和」が失脚していく時代

- 一度目の昭和の失脚と敗戦
- 二度目の昭和の失脚・・・戦後的昭和の価値観が価値を失っていく

3. 戦後的昭和の価値観とは何か

- 経済発展が人々に豊かな人生をもたらす…その象徴としての東京オリンピック
- 企業人として生きる
- 農村から都市へ・・・都市にこそ未来がある
- 自立した個人、世界に雄飛する個人
- 強い個人になるためには学歴が重要
- 国民を守るのは強い軍事力よりも福祉
- 現在ではそれらが有効性を失っていく

4. 戦後的昭和の空気が嫌われていく時代

- 上から目線、啓蒙主義
- 昭和的だと感じさせる政治勢力の衰退
- 政権への消極的支持率は高くても、政治家個人は嫌われていく
- おそらく再評価されるのは昭和がつくりだしたサブカルチャーだけ

5. 昭和に戻りたい人々、戻りたくない人々

- 強い経済とそれを促進する強い国家を求める人々は存在する
- 他方で脱昭和を模索する動き

6. 改元、オリンピックは脱昭和を感じさせるか

- 昭和に戻りたい人たちのイベント

7. 脱昭和から生みだされていくもの

- 経済成長が目標ではなくなる
- 企業の時代、都市の時代が輝きを失っていく
- 個人から共同性、ネットワークへ
- 明治維新、明治という時代の再検討
- 世界史的には、近代革命の再検討

8. 近代革命は、「革命」たり得たのかという問い

- 絶対王政時代の国家権力がそのまま温存されたという問題
- ゆえに国家が強大な権力をもち、この権力を獲得するためにたえずポピュリズムやデマゴグが発生する
- 自由、平等、友愛、民主主義といった近代の理念は、強大な国家の制度に組み込まれることによって、民衆の自由や民主主義を圧殺する要素になった

9. 大きな課題をかかえた時代

- 私たちはこの時代を引き受けることができるか
- それとも壊れゆく時代にしがみついていくのか

10. まとめに代えて

- 根本から考え直していく必要性が生じた時代のなかで

改元で、東京オリンピックで、 日本はどう変わる？ 高知はどう変わる？

2018(平成30)年3月1日(木) 18時～20時
高知県人権啓発センター「6階ホール」
高知市本町4丁目1番37号

哲学者 内山 節 氏

今日は改元と東京オリンピックということですが、率直に言いますと、大した話にはならないだろうというふうに考えています。というのは、もうオリンピックで熱狂するとかそういう時代ではなくなってきたと思います。オリンピックが始まればその時には日本は金がいくら入るかとか、そんな話は出てくるでしょうけど、昔のような熱狂とは違っていいのではないかという感じがします。それにゼネコン等はあと2年間くらいそれなりに潤うでしょうけれども、せいぜいそれだけです。やっぱり東京オリンピックの時というのは、一面では戦後が終わったというそういうイベントでもあって、新幹線ができたとか高速道路ができたとかいろいろあったわけですが、そういうことでもなくなってしまったわけです。ですから多分、基本的には淡々とオリンピックを迎えて、淡々と終わってしまうという、そんな感じがします。

また改元というよりも天皇制の在り方という



のも、なかなかそう簡単にもいかない話だろうというふうに思っています。実際のところ今、日本で世論調査をすれば大多数の人が天皇制否定ではないというか天皇制はあって良いという、そういう言い方になってくるだろうと思います。しかし、実際には象徴天皇制ということ自体、象徴っていうのは一体なにを象徴してどういう行動を取らなければいけないのかというところが、天皇制が良いか悪いかは別にして相当の矛盾があると考えます。ですから、今の天皇もそうですけれども、国民に寄り添うような姿勢を続けていく、そのことに対しては一般的には支持は高いでしょう。しかし、そうやっていけばいくほど、むしろ象徴というよりも国民のアイドルみたいになってしまうわけです。国民のアイドルとしてそのアイドル制を維持するというのも、また非常に大変な話ではないでしょうか。

実際問題としては、日本の場合には戦前から実質的に象徴天皇制だったわけで、形の上では明治維新は王政復古をしたわけです。王政復古はどの時代に復古しようとしたのかということなのですが、神代に復古するという非常に難しいことをやりました。つまり、神武天皇など歴史上は存在しないと思われている、いわば神の名において天皇が日本を統一するというので、その時代に復古するというのを明治維新は狙ったのです。しかし、実際に創ろうとしたのは近代国家でした。ですから神代に復帰するというのと近代国家を創ることということは初めから矛盾していたわけです。そうすると、結局近代国家を創るという方で

進んでいけば、神代に戻った天皇は結局日本の象徴のようなものにならざるを得ないのです。

だから、天皇の力そのものが制度上は天皇大権ですから、天皇が何でも決めていいということなのですが、実質的には役人であったり政治家であったり軍部であったり、そういう人達が政治を決めていて、結局、天皇はそこに「イエス」というハンコを押す人みたいにだんだんなっていかがるを得なかった。戦前も一つの象徴天皇制みたいな形になり、それを戦後文字通り象徴天皇制にし、しかも神代の天皇としてではなくて、この世の天皇として象徴天皇制にした。結局、国民のアイドルみたいな感じで、それは言葉を変えれば国民に寄り添うというということだったわけですが、このこと自体が矛盾を持っているわけで、ですから率直に言って「これからどういうふうに維持していくのかというのは、結構大変なのですよ」ってそういう気がします。

本来からいうと象徴というのは富士山みたいに黙ってそこに君臨しているもので、象徴が自ら意志を表明したり発言したりするというのは、象徴としては本来無理があるんです。ですから「そろそろ辞めさせてくれ」とかいうのが、国民感情としては「もう年だしそれでいいのではないか」という話になるかもしれませんが、それは象徴という天皇制の在り方として妥当なのか、おそらくその辺が右側の政治家達の言うところだろうと思います。そのような矛盾を抱えながら現在進行しているという気がします。

国家と国民に 共通課題があるように感じる時代は 終わりかけてはいないか

私が中学生の時に東京オリンピックがありましたが、うちの近くでも道路拡張が行われて、実はあの頃東京の道というのはもの凄く細くて狭かった。ですからオリンピックを契機に、当時の建設大臣が陣頭指揮を執るような格好で東京のいろんな道をかなり一気に拡張しました。

しかし、当時のやり方はかなり凄まじいものが

あって、用地買収を時間に合わせてやっていくわけですが、それに応じない人達もいたわけですが、その人達をいかに追いつめていくのかという、それは今以上に非合法な方法を取っていました。私の家の比較的近くでも拡張された道があったんですが、最後まで残った家が1軒ありました。何とその家を真ん中にして両側の道を開通させてしまった。車が両側をバンバン走るわけですから、その家の人は家の出入りもできない、そういう状態になったわけです。それでも退かない人達に対しては、暴力団を使って嫌がらせをやって追っ払ったという、実は東京オリンピックは裏でそういうことが盛んに行われた。そのことによって東京の道が良くなったと言ってしまえば良くなったのですが、そういうことをしても何か許されるような時代はもう無い、さらに言えば国家の方針と国民の気持ちに共通課題があるみたいなそういう時代がもう終わりかけているのではないかという、そういう気がします。

私自身はオリンピックどうこうという問題よりも、むしろ今の時代というのは、昭和的なものが失脚していつているのではないかという気がしてならない。昭和というのは私の気持ちとしては二度失脚したと思っています。一つ目は敗戦による失脚です。戦前の体制というものが失脚してしまっただけで、そこから戦後の昭和というのが始まるわけですが、どうも昭和的な価値観が価値を失っているという、そのことが社会の中にじわじわと浸透してきている気がします。昭和的な価値観とは何だったのだろうかと思えば振り返ってみると、これは戦後の昭和の価値観です。経済発展が人々を豊かにしていって、また豊かな人生をもたらすという、その象徴として東京オリンピックがあったということでもあったわけですが。

私は東京で生まれていますが、1950年代ぐらいまではまだまだ戦後の余波があって空襲からやっと立ち直ってきたという雰囲気でした。だから、小学校に上がった頃は自転車が欲しくて、親に「自転車を買ってくれ」って言うのは何年もかかるような感じでした。その頃アメリカのホームドラマがテレビで放映されるようになって見ていたら、一人1台みたいな感じで車が

あって、こっちは自転車を買うのが精一杯という状況ですから、こんな時代は日本には絶対こないだろうと思っていました。そうしたらそれから10年もしないうちに日本でも自家用車がそこら中走っているという時代に移ってきました。ですから、そういう雰囲気の中で経済発展が人々の気持ちの中に強く入りこんでいた時代だと思います。そしてまた、そういう中で企業に入っていくことは、有利な生き方になっていった時代でもあったのでしょう。戦後的な不安定っていうのがその前提にあると思われま

農村から都市へ …都市にこそ未来がある

もう一つは、それまでの人口は圧倒的に農村人口が多く、農村の近代化とか農業の近代化だとかが始まった時期でもあったわけです。いわば人間の暮らし方が、農村で自分達の食べ物を作ったりしながら暮らす時代がだんだん終わってきて、農村でも比較的コストのかかる農業に移ってきた。化学肥料を買ったり、農薬を使ったり、それからまだトラクターというところまでいきませんでした。それでも耕運機を買ったりとか、そういう時代にだんだん移ってきました。つまり、農村の暮らしは収入的に有利ではなくなってきたということです。

それに対して都市の方は労働力不足で、しかも当時日本には正確には終身雇用制という制度が無いのですが、実質的には終身雇用的な社会になっていました。また、日本の場合は賃金体系が生活給賃金のような性格が強く、年齢と共に賃金が上がっていくという賃金体系を作っていました。企業人になるというのは、いわば有利な道として当時の人には感じられていて、そういうところに一つの昭和的な価値が出てきた。それから農村から都市へ行くというまた一つの価値があって、都市にこそ未来あるという雰囲気の時代を創っていたと思います。

自立した個人・ 世界に雄飛する個人・ 強い個人になるために

そういう中で、私個人は人間としては自立した個人になっていくということが絶えず言われて、強い個人になるとか、自立した人間になるとか、それこそが「未来の人間だ」みたいなことを言われていました。同時に60年代の後半ぐらいになってくると、ぼつぼつ世界に雄飛していく個人が、何か一つの憧れになっていくような時代も生まれてきました。しかし、強い個人とか自立した個人と言ったって、実際は不安定な個人なわけで、つまり農村から都市へ出て来たりして、そこでやっと生きてきた個人というものに過ぎなかったわけですね。その人間が少しでも強くなるために必要なものとして学歴があって、それが学歴変動型の社会みたいなものを作っていたと思います。

今以上に教育熱心な時代でもあって、私は東京の世田谷区という所にいましたが、中学生ぐらいになるとクラスの9割ぐらいの人達が塾か家庭教師が付いていたという感じでした。うちの近くにとっても勉強ができる女の子がいましたが、その人はいつも学年でトップとか悪くても5番以内とか、いわば優秀な女の子でした。その方は英語・数学・理科・社会とか国語とか教科ごとに家庭教師を付けていました。ですから、その家の前を夜に通ったりすると窓越しに家庭教師と一生懸命勉強している姿が見えるのです。そこまでやっている人は珍しかったですが、家庭教師が付いているというのが例外ではなくて、この世は学歴で決まるみたいなそういう雰囲気があり、それが非常に強かった時代でもあったと思います。

その頃には戦後的な影響もあって国民を守っていくのは強い軍事力ではなくて強い経済力や国の社会福祉的な力、そういうものが国民を守っていくんだという、そういう雰囲気でもあったということです。

現在では それらが有効性を失っていく

しかし、そういった様々なものがどれもこれも有効性を失い始めた。経済発展が我々を豊かにするという話も、もうかなり多くの人達が首を傾げている時代です。また企業に入っていくということが魅力のある選択なのかっていうのも若い人達がみんな迷っているという感じです。といっても学校を出てもすぐに自分で何かするっていうわけにはいかないから、そこでは一生懸命就職活動をしていくのですが、実際には3年も経つと半分ぐらい辞めていく時代でもあります。また、今の非正規雇用的な働き方とかいろんなものが蔓延していますから、そういう意味でも魅力が無くなっていきました。企業に入れば一生安定するというのももう物語になってきてしまって、もちろん非正規雇用になれば安定はしないし、生涯賃金が上がるということも無いということもあります。

今、大きい会社が軒並み人員整理とかそういう話になってしまっています。ついこの間までは、日本のそうそうたる電気メーカーが何処もここも経営危機みたいな、こんな想像はできなかったというふうに言っています。それから銀行の人員整理っていうのも結構問題になり始めています。みずほ銀行でも1万8千人減らすとか言っている。1万8千人といったら家族入れたら一つの結構大



きい都市が無くなってしまいうぐらいの人員整理なわけです。つまり、昔のように大きい所に入れば安定するとかいう時代ではないってことが分かかってきたと思います。

そういう中で、じゃあどうしたらいいのかっていうのをいろんな形で模索している時代ではないでしょうか。都市の方に未来があるということでもなくなったわけですが、まだ東京への人口は集中が続いているし、就職先を探そうとするとやっぱり東京しかないとか、そんなことで出てきちゃう人はたくさんいると思います。実際には地方の大学の学生さん達、非常に多くの人達が地元就職を希望しています。ところが地元で就職先が無く、しょうがないから東京に出てくる、そういう人達もたくさんいる時代です。だから、東京に行けば明るい未来があると思って行く時代は終わっていて、しょうがないから東京に行くみたいな、そういう形での東京への集中っていうのはまだ続いている、そんな感じです。だけどその東京でもだんだん周辺の空洞化っていうのは始まってきているわけで、東京圏全域に人が増え続けているとかそういうことでもないのです。

それから、自立した個人として生きるっていうような話もだんだん多くの人にとっては意味のない言葉になってきていて、むしろどういうふうに結びあったらいいとか、どういった関係性を作ったらいいとか、それからいろんな所でコミュニティーを作ろうとか、そういう方向に関心が移っている時代でもあります。そういうことが次々と起きてくるというのは、ある意味では自分達の親の世代の生き方を見ていて、「これでよかったのかなあ」という感じが見えているといえると思います。実際に高度成長期に都会に出てきた人達っていうのは、取りあえずは本当に何も無く東京に出て来た。そこで就職口を見つけて一生懸命働いていると。大体最初に結婚して住んだ場所っていうのが郊外の公団住宅とかそういう団地になったわけです。ところがそこに住んでいる人、不便なことだらけだと。それは公団住宅って部屋も狭いとかありますが、それ以上に買い物する場所が近くに無いとか、病院が無いとか、幼稚園が無いとか、無い物だらけっていう状況だったわけです。

その中で住民運動みたいな感じで、もう少し自分達の暮らす地域にこういう物があつたらいいとか、ああいう物があつたらいいとかそういうことが運動として起きるわけです。

その運動の中に上手く入りこんだ勢力としては、共産党があつたわけです。ですから公団住宅型の郊外の住民運動というのは、大体共産党主導型で共産党が勢力を伸ばします。一時期、共産党はこれからは自共対決時代なんていう言葉を使っていました。当時はまだ社会党・共産党の時代でしたが、そういうことを共産党が言うような地域での勢力拡大がありました。しかししばらくしてくると、少し余力のある人達は結局団地から抜け出して1軒屋を買うとか、あるいはその後になりますとマンションを買うとかそういう感じになっていって、だんだん公団住宅が何とも言えない場所になっていきました。そのような状況で住民も減ってきて、今度は逆に共産党の勢力を失わせる結果にもなっていた。だから、そういうような動きも含めて、何かこうある時代があつたという感じがします。

だけど今、学歴っていうことを一つ取っても、例えば中央官庁にキャリア役人として入りたいたいとかいうことになる、「それなりの学校に行っておかないと入れませんよ」という話が出てきたりします。そういうことを目指している極々少数の人を別にすると、何か学歴で一生が決まるみたいなものっていうのは、そういうものに乗りたいもないし、ちょっと違っているという、むしろそのような雰囲気の方が強いと思います。ただ就職ってことを無視するわけにはいかないので、「できるだけ良い大学に入っていた方がいいよね」くらいのことは言えるのですが、それに対する本気度っていうのは以前とは違うし、またそんなものからは脱出してしまえと考える人達っていうのも少なからずいます。そういう時代に移っているような気がします。

戦後的昭和の空気が嫌われていく時代

このように、昭和の時代とか戦後的な昭和に一度構築したかに見えた物っていうのが、次々と今その生命力を失ってきているといえます。そういう意味で敗戦による昭和の失脚は劇的に起きましたが、今は静かな変動として何か昭和が終わってくるという、そんな時代を迎えているじゃないかなというふうには私は見えています。昭和的な雰囲気とするものは今の若い人は大嫌いなのです。つまり、例えば上から目線なんていうのがそうなのですが、昭和の時代っていうのは、上の人達が若い人達を指導する、飲み屋に行けば「人生とはそんなもんじゃない」とか言って上役が若いやつに説教している、そういう光景は、かつてはいっぱい見られたのですが、今あれやっちゃったら本当に嫌われるっていう感じです。また会社の職場単位で飲みに行くとかいうこと自体がもう嫌われるという、そういう時代でもあります。サラリーマン文化みたいな感じで昭和に作ったものを今再現している人がいると、みんなから嫌な奴みたいに思われてしまうっていうのがあります。

昭和の時代っていうのは、そういう中で知識をたくさん持っている人が自分の知識を下の人に教えるみたいな雰囲気があつて、これはある意味では啓蒙主義みたいなものを作っていたわけです。これは近代の仕組みでもあります。啓蒙主義的雰囲気があるものは嫌われていくわけです。

これは全て良い悪いの話じゃないですが、例えば新聞で言うと朝日新聞的なものが何となく嫌われていく、だからといって読売新聞を取るわけにもいけないので、朝日新聞取っているっていう人はたくさんいるのです。やっぱり、朝日新聞の匂いっていうのは何となく上から目線の啓蒙主義的なものを感じさせる。そうする、「なんかちょっと違うのかなあ」という気持ちを抱かせる。だからといって、インターネット上にみんながボンボン投稿すりゃいいという話ではないのですが。ただ、何か知的なものが上に立つという、そうして

その知的なものを持っている人が持っていない人を指導するみたいな、そういう雰囲気というのはなんとなく昭和的で嫌だなあと思われているということです。

昭和的政治勢力の衰退

だから、今日別に政治の話をしに来たわけじゃないのですが、共産党とか社会党は勢力を伸ばすことは無いだろうという感じがします。なぜかという、共産党の人々が感じているのはやっぱり啓蒙主義なのですね。自分達は正しいことをしていて、正しいことを知らない人達の目を覚まさせるみたいな、そういうものを共産党から感じます。それは社民党からも感じるわけですが、社民党の方がまだいろんな人がいるという感じはします。前の女性党首は何かそういうものを感じさせました。人々からするとその主義主張が正しいという以前に何となく付き合いたくない人っていう印象を与えてしまうような気がするのです。だから逆に言うと、今の政治の世界は昭和的な政治家だらけなんです。そうすると、本当の意味で支持する政党が無いという、つまり自分が本当に親近感を感じる政党が無いということになっています。今の安倍政権でもそう長くは続かないだろうと思っています。というのは、やっぱり安倍政権って昭和的なのですよね。だから、何となく好きな政治家ではない。ただじゃあ他のところはどうかっていうと、それもまた昭和的です。さっき言ったように共産党は昭和的ですし、社民党もそうだし、公明党もまた公明党的・昭和的っていう感じがしています。

そうすると結局消極的な判断として、何となく選挙すれば自民党がある程度は勝つ。ただ今回の選挙を見ている、唯一昭和的な雰囲気を払拭したのは立憲民主党だけなのです。だから、立憲民主党というのは「自分達に任せてください」ということを選挙カーの上から言わなかった。むしろ選挙民が主人公だということを言い続けたのです。「あなた方は主人公なんだ、だから一緒にやりましょう」というのを言い続けた。あれは唯一、昭

和的でない雰囲気を与えました。それは結果として、あの短期間にも関わらず一定の支持を取ることにもなったし、それからまたその路線を続ける限りは一定の支持は続くという、そんな感じだろうと思うんです。実際に日本の選挙では、何があっても自民党に入れるという人達が、今の場合は公明党を含めてですけど、大体その勢力って3分の1ぐらいなのです。それに対して、何があっても反自民側に入れるという人達が大体3分の1ぐらいです。残りの3分の1ぐらいはその時に適当に考えるという人達になるわけです。

その構図というのは実はずっと変わってないといってもよく、選挙そのものは自分達の陣営にいる3分の1にみんな投票してもらえるかどうか、そこからこぼれちゃうと負けてしまうということでもあります。それからもう一つは、中間の3分の1の人達にどういうメッセージが投げるか、そこで決まるという感じですが。これ別に日本だけの話じゃなくて、内容は違うけど世界的にもそうです。たとえばアメリカの大統領選挙でいうと日本の場合には「トランプ、トランプ」と言っているようなニュースばかり流しますから、もの凄い盛り上がり上がっているような感じですけど、アメリカの大統領選の投票率って大体50%ぐらいなんです。半分ぐらいの人達が投票してないです。低い時には40%台ぐらい、高い時で50%台ぐらい。大体それぐらいしかない。だから、多くの人達は今の政治の在り方にうんざりしているのです。そういうことであって、今の政治の在り方っていうのが日本というならば、昭和の政治みたいなものに対して、もううんざりしているっていう、それが現実という感じがしています。

今の日本の政権でもそうですけれども、真ん中の人がどっちに動いたとか、あるいはこぼれたとか、そんなことも含めて結果としては消極的な選択として今の自民党を軸にする政権というのは選ばれているのだと。だけど、じゃあ政治家個人で圧倒的に人気がある人はいるのかということになると、安倍の人気もそんなには無いし、自民党の中で次を狙っているような政治家って、誰もかれも人気はたいして無い。つまり、みんな昭和の政治家というわけです。それは多分、小泉進

次郎も同じで、若くて何かやっている形だけの間
はいいのだけど、あの人の発言とか聞いていると
意外と昭和の政治家なんです。その化けの皮はそ
のうち剥がれていくと思います。そうすると、結
局本気になって応援するような、あるいは親近感
を感じるような政治家は何処にもいないという感
じになっていて、後は立憲民主党を軸にして何処
まで昭和的ではない政治を定義できるかという、
そこにかかってくるというそういう感じがします。

昭和に戻りたい人々、 戻りたくない人々

もちろん、昭和が作ったものの中で、これから
再評価されていくものも出てくるだろうと思って
います。だけどそれは多分、サブカルチャー的な
もので、例えば昭和の音楽とか、あるいは昭和の
映画とか、そういう仕組みのものは、ある種懐か
しさも含めて再評価されていくってことはあるで
しょう。

ただ、昭和という一つの時代を作った戦後とい
う一つの時代ですけれども、それを作った軸にな
っていったようなものは、これからますます失脚
していく時代だと思えます。だから、昭和が終わ
るというよりも何か失脚していくという感じがす
るのです。ただし、そういう時代になってくると

昭和に戻りたい人達も出てくるわけで、その一つ
は経済界です。高度成長したあの時代に戻りたい
って人達が出てくる。それから強い経済を軸
にして強い日本を創って、そしてまたそれは軍事
的にもある程度裏づけられた強い日本みたいな、
そういうようなものを求める人達というのは、必
ず一定数出てくるだろうと思います。

半面、昭和から昭和とは違うものを模索してい
る人達も発生すると思います。だから、何となく
今の時代というのは昭和に戻るのか、それとも脱
昭和で模索をしていくのかという対立みたいなも
のが、いっぱい社会の奥の方でうごめいている。
それがはっきりした姿をとらずにうごめいている。
「そんなような時代を迎えているのではないかな
あ」なんて思いながら今、生きています。

実際に高齢者が全員そうだというわけではない
のですが、昭和を頑張って生きた人達で今、高齢
になっている人達は東京でみると、その人達の晩
年はもう見えているという感じで、その人達は企
業を離れてから以降、本当に孤立していて、仮に
お金があったとしてもとてもじゃないけど幸せな
人生を送っているとは思えない。だから、だらだ
らとお金がある人達はいろんな消費をしている。
だけどその消費が本当に楽しくてやっているとい
う感じよりも、何となく惰性でやっているだけと
いう感じです。お金がある高齢者はやること無い
から海外旅行ばかりしていると。だけど海外旅行



も本当に行きたい所があって楽しくて行く、それだけ余裕があるのだったらどんどん行けばいいんじゃないかという気がします。しかしやる事ができないからスケジュールをこなしているだけという人達が結構たくさんいて、私より上の人達が「この間旅行してきた」と言うので、「何処行ったの?」って聞くと「何処行ったのか分からない」と言うんです。つまり添乗員さんがずっと連れてってただけとか、何も記憶してないとか、記憶しているのは何処かで食べた食事がおいしかったとか、そこのボーイさんが凄い美男子だったとか、そんなことばかり憶えている、結構そういう人も結構多いです。

その姿を見ていて仮に成功した、昭和的な価値観でいうと成功者なんですけど、そういう人達でもこんなものかっているのがあり、それから実際には昭和的な価値観の中で、そういう成功をしなかった人達っていうのもたくさんいるわけです。その人達というのは、本当に孤立した上に生活も大変という、そういう悲惨な生活をしている感じがします。だから、成功した人も成功しなかった人も最後はこれかっているのが見えてきちゃっていて、ああいうふうにはなりたくないという、それが今の比較的若い世代の気持ちでもあり、そういうことを感じていけばいくほど、昭和のままで

は駄目だということになってきたような気がします。実際そういうことですから今、いろんな地域にいろんな人達が動いている時代でもあるといえると思います。

私のいる群馬県の上野村という山村の場合には、今人口が1,250人ぐらいで、明治になって町村制ができて以来一度も合併したことがないです。明治に上野村ができた頃、1,000人ぐらいだったわけですので、1,250人というのは多くはないですが、これでもいいかなと。持続さえできればいいかなという、そんな感じにいる村ではあるんです。

ただ、うちの村の場合には、その1,250人中260何人かは1ターン者なので、外から来た人達は人口の2割を超えています。今、村の主力はそちらに移ってきているという感じがします。実際、上野村というのは高知県にもないような村です。というのは村の中に田んぼが1枚も無いのです。おそらく高知市にもちょっとくらいは田んぼがあるんじゃないかと思います。大川村とかあちに行ってもあるような気がしますので、それに比べれば本当に何にも無いような村なんですけど、そこにもたくさんの方が今、来ている時代であります。うちの村はちょっと多いのですが、結構何処に行っても今、そんな感じにだんだんできています。だから、一方では人口減少が続いてるのだけど、一方においては新しく入ってくる人達も結構いる。

それで上野村では人口1,000人弱ぐらいまでは覚悟しているんです。というのは人口構成がこのマイクみたいな感じになっていて、下の方は真っすぐです。ですから、大体同じぐらいずっといます。ところが上の方はボコっといる、そういう感じなので、ちょっと失礼な言い方ですけど、やっぱりどうしても上の方があの世に旅立ってくれるわけです。なので、ちょっと人口はもう少し減るかなあと。ただ、その後は大体真っすぐなわけです。何となく維持できるのじゃないかなあという感じです。去年ちょっと少なかったですが、去年の新生児が9人、だいたい毎年10人ぐらいは生まれているので、「去年二桁にならなかったのは少なかったなあ」って村の中では言ってるんですが、大体そんな感じです。だから、小中学校も1



学年大体10人ぐらいいるという感じですが。人口が1,200人台の村ということから考えていくと、かなり健闘しているほうだと思います。ちなみに出生率がうちの村は2.2ありますんで、群馬県内市町村第1位ということになっています。

もちろん行政もいろんな支援をやってますし、山奥の方でもともと自分達で助け合いながら生きているという、そういう雰囲気強く残している村です。そういう中でいろんなことができています。それから今、いろんな形でソーシャルビジネス的なものを起こす人達も本当に増えてきたし、いろんな模索をし始めてるという感じですが。

東京で、例えばソーシャルビジネス系の企業を作った人達も、全体から見ると経営的には苦戦をしながら志を守ってやっていると、そういう雰囲気が強いんです。ただ初期の頃から始めた企業の中には、逆にソーシャルビジネスであるが故に安定した利用者とか、安定した消費者とか、そういうのを抱え込んでいて、そのために以前より経営が安定しているというところもぼつぼつ出てきている感じですが。だから、買う側としてもどうせ買うならあそこで買おうかみたいな、そういう雰囲気になってきているしということで、独自の消費者を含めたネットワークができ始めている。そういうところでは、かえってソーシャルビジネスだからという形で支持が集まってそれで安定してくる、そういう新しい現象も最近ぼつぼつ出始めているという感じがします。

伝統回帰

実際に今、新しいことを始めている人達というのは、昭和以前の過去に戻るといえるのか、伝統に戻るといえるのか、そういう雰囲気が強いわけで、ただし昭和以前の伝統に戻るといえるのと、戦前に戻ったのでは昭和そのものですし、それから戦前ではないってことになる。明治以降に戻ったのでは、昭和への繋がりの中にしかないわけで、そうすると考え方としては近代以前に戻るわけですが。そういう方向に気持ちとしては動いていく。だから、今やっていることはみんな伝統回帰なのです。“ソ

ーシャルビジネス”なんていうと新しい言葉を使っていますが、社会の中で有益な仕事を作っていくという考え方はもともと伝統社会の企業というか仕事の作り方はみんなそうだったわけです。だからあの時代に戻っているだけの話なのです。

実際うちの村で今、小規模だけど木質系のペレットを使った発電をやっている。ペレット発電で最終的には地域電力で100%賄えるようにしたいと工夫している最中です。「自分達で発電して地域の電力賄えるようにしようよ」というようなことが議論され始めたら、高齢者達はみんなあっさり「お、やろう、やろう」って感じになったんです。というのは昔やっていたから。うちの村は東京電力なんですけど、東京電力の電灯線が伸びてきたのは1956年、1957年ぐらいなんです。それまでというのは、村の中の拠点にはあったんですが、くまなく電気が回っているという時代ではなかった。だから、50年代の終わりぐらいになってきて、みんなして東京電力から電気を引っ張ってきた。今は家を建てたからって電力会社に連絡すると、軒下までは電力会社の責任で引っ張ってくれて、そこから先は自分の方でやるわけですが、あの頃はまだそういう雰囲気ではなかった。送電線というか電灯線の最後の所から自分達の集落までは、自分達の負担でやらなきゃいけない時代だったのです。当時電気を引っ張ったという話を聞くと、何百万円もいって、負担し合って、やっと電気を引っ張ったみたいな、そんな時代でもあったわけです。

ただ、その前から小規模には電力があった地域もあった。じゃあ、その地域はなぜあったかという、比較的金のある人達が地域のためにお金を出し合って、それで地域電力会社を作ってそこで小規模水力発電とかをやって、その電気を回せる所に回すというようなことをやってきた歴史があるわけです。だから、そういうことを知っている高齢者達は、「昔やっていたんだから地域電力やろうぜ」みたいな感じで、みんな「やろう、やろう」なんて話になったのです。起業活動自体が、今で言うと社会的企業とかソーシャルビジネスとかいうような、むしろそういうみんなの為になることをきちっとやっていこうみたいな、そう

やって経済を作っていこうみたいな、それはむしろ伝統の在り方なんです。今、伝統の在り方に戻ろうとしている人達がいるっていうふうに言ってもいいし、例えば「コミュニティーを作ろう」とか、「共同体を作ろう」とか言っている人達がいますが、これもまた伝統に戻ろうとしている。伝統社会ではみんなコミュニティーと生きていた、ただし時代が違うからコミュニティーの形は違っていかないということは言えるんだけど、でも基本的な考え方は伝統に戻るといことです。

私のいる村では使うことのできない木がいっぱいありますので、そういう木を使ってペレットを作ったり、そこで発電をしたりとか、今は暖房にも使っていますけれども、そんなことをいろいろやっています。その仕組みを作った時にも、僕らの考え方は伝統回帰、つまり昔の地域エネルギーで暮らした時代に戻りたいと。昔の地域エネルギーで暮らした時代もエネルギーの柱は薪だった。だから、もう一度薪で暮らす時代に戻りたい。生活形態も違ってきているし、家族構成も変わってきているので、昔の形態そっくりに戻そうとしちゃうと逆に戻れなくなっちゃうわけです。そこに今の新しい技術が加わるわけですから、新しい技術を使ってペレットを作ったのです。それで使いやすい形にもっていく、あるいはそこで発電をすとかです。形態は新しいけど考え方は伝統回帰ですという、そういうことで、うちの村なんかはいろいろやってきました。

今、村中で「ソーシャルビジネスという仕組みにしよう」なんてしょっちゅう言っています。つまり、村の中にもいろんな仕事をしている人達がいる。だけど、そのいろんな仕事をしている人達が、自分で独立した仕事をしてると考えるんじゃなくて、村の仕事の中の一部を受け持っているという、そういう形にもっていつている。村の仕事としてはいわばソーシャルビジネスであると。ソーシャルビジネスがある以上は、何らかの社会的使命があるわけで、じゃあ、上野村はどういう社会的使命を持っているのかというと、これぐらい小さい村でも持続できる村があるということを証明してみせるというのが上野村の気持ちなわけです。ですから、それがもし証明できれば、いろん

な地域の人達に一つの勇気を与えることはできる。まずもってそれが上野村の社会的使命と思っています。

それから、もう一つは人間が暮らして経済活動をいっぱいやっているけれど、自然と人間は調和し続けているという、これもまた一つの社会的使命、ある意味では上野村みたいな山奥の村だからこそできる社会的使命でもあるわけです。そういうことをやりながら村全体の一つの経済世界を作っていくって、そこでそれぞれの人達はどこかのパーツを分担しているんな工夫をしたり、もしも儲かるのだったら大いに儲けてもらって結構なんだけれども、それは村の経済体系・労働体系それがあってこそ成り立つものなのです。そういうふうな村の在り方にもっていきたいっていうのが、上野村の今の方針です。もちろん、「今、そういうことが全部ちゃんと実現できますよ」と責任をもって言うことはできないですけど、ただ、やっぱり方針を持たない村っていうのは、結構たくさんあるわけです。上野村は方針だけは、しっかり持っているわけです。かなり頑張っている村といってもいいような気がします。そういうことがいろんな形で模索されていくと、これからいろんなことが再検討されていくと。

明治維新の再検討

最近ちょっと動きが出てきているのは、明治維新の再検討という動きです。去年面白かったなあと思ったのは山口県に講演に行った時のことです。その市長さんが「ここは高杉晋作が出た所で…」とか、まさに明治維新の発祥の地みたいな挨拶をされていました。その話が終わって僕は山口からそのまま東北に行ったのです。

東北に行って、夜懇親会で雑談をしていたら、そこにいた人が「松下村塾が世界遺産になったけれども松下村塾が世界遺産になったってことは、将来にISが造っている学校も世界遺産になるのかなあ」と言うから、そうしたらみんなが「そう、そう」という話になって、それで松下村塾っていうのは若者を洗脳してテロリストにしあげた学校

だと、それが世界遺産になるんだから IS がイラクかなんかに造った学校も将来は同じことで世界遺産になるのかと。それはもちろん冗談ですけど。今、東北に行くとそんな雰囲気なんですね。大体明治維新といたって、実は幕府そのものは今の体制では駄目だっていうのが分かっていたので、いろんなことをやろうとしていたんです。だから、大名を全部拝借して参議に位置するというのから始めて、それで合議制にして、いわば幕府の在り方を変えていくとか、いろんなことを幕府もやろうとしていたわけです。ですから決して薩長・土佐も含めて、そこだけが新しい社会像を持っていたわけじゃなくて、日本中変えざるを得なくなっていたと思います。

実際問題として、日本の近代工業というのは、一番最初にできたのは横須賀にある海軍工場なんです。海軍の武器を作る工場です。あれが日本で動いた最初の近代工場です。あの工場を造ったのは徳川幕府なわけで、小栗上野介っていう人がボスになって設計をしてやった。それを明治政府が受け継ぐような形になって、日本最初の近代工場になっていきます。ですから、そういうことも含めてもう既に新しい動きはあったっていいですか。東北はそういう気持ちっていうのは未だに強く、むしろ今強くなってきたっていう感じです。ですから、今年は明治維新150年ということなんですけど、東北は東北列藩同盟150年記念シンポジウムをやるって言って、あれは正確には新潟も入っているので東北蝦夷列藩同盟なんです。東北蝦夷列藩同盟150年記念をやって、新潟県知事が参加するとか言ってました。何処をどういうふうにするのか僕にも分かりません。東北は今の秋田で佐竹藩なんですけども、東北蝦夷列藩同盟を最初に裏切ったのは佐竹藩なんです。それ以降未だに「佐竹は信用できん」という言葉が東北にはあって、「秋田の奴は信用できん」という意味合いですけども。

最近の選挙では東北はあまり自民党が出ないんです。新潟もあんまりは出ない。ただ秋田だけは勝つんです。ですから、選挙が終わるたびに「やっぱり佐竹だ」という言葉が東北であてがわれるという、そういう感じです。ですから、それは別

に東北が正しいかどうかではなくて、何か日本という一つの塊でものを見るっていうのが終わりかかっているなあという、それを僕はとても良いなあというふうに思っています。だから、長州には長州のしている近代社会観とか幕末観があってもいいけれど、東北は全く違う近代社会観を持っているということであっていいらしいです。さらには、沖縄は沖縄の近代社会観とか歴史観を持っていていいし、そういうものが日本の歴史みたいな感じで1本にされていることの方が気持ちが悪い。それぞれの地域で自分達の日本の歴史というものを持っている方がずっと正常という気がします。

だから、そういう方向に向かって行く分解みたいなものが今始まっています。そういうことが選挙でもあるわけです。前回の参議院選挙では東北は見事に自民党が秋田を抜いて全敗したんですね。そうすると東北に行くと、やっぱり東北列藩同盟だって話がまた出てくるわけで、日本を分解していく時代といいますかそっちの方向に実はきてるんだということだと思います。

近代革命は「革命」たり得たのか

これもまた世界的な動きで、スペインに行ってもカタルーニャが独立しようとするとかです。



EUとしては、カタルーニャ独立は絶対認めないという方向なのだけど、それを認めたら何処の国も同じ様な問題を抱えてしまう。スペインだってカタルーニャが独立しちゃえば次はやっぱりバスクの問題になるし、バスクが独立しちゃえばフランスの中のバスクの人達はどうするんだっていう話がまた出てきてしまうし、そういうことがそこから中の国であります。それぞれの地域は、自分達の国の歴史みたいなものにだんだん分解していて、その歴史観は地域によって全然違うわけです。そういう時代へ世界的に動き始めた。そうなるくと、今度は世界的には近代革命とは何だったのかという再検討が必要になってくるっていう気がします。

僕らが子どもの頃に学校で習った局地的なことでは、1789年にフランス革命が起きた。そこで自由・平等・友愛というスローガンが出て、それが近代社会の理念になった。つまり、そのフランス革命こそが輝かしい近代の幕開けであったといえます。もちろん、イギリスではその前から市民革命とかやっていますけれども、そんな感じで私達は歴史的にも教わった。

しかし今になってくると、この歴史観で本当にいいのかなっていうのが出てきて、例えばフランス革命っていうのはある意味では大きな失敗だった。何をやったかという、絶対王政期の最後

の頃の王権が一番強かった時代のその権力構造をそのまま共和制で受け継いでしまった。そこに非常に大きな失敗があったと。つまり、中央権力が一番強かった時期、その中央権力が一番強かったのをそのままにしてそれを共和制に代えただけっていいですか。だから、国家の独裁体制は維持されたということなのです。そういう形の共和制だから結局権力を持った者っていうのは、強大な権力を手にしたわけです。その後フランス革命などは直ちにジャコバン独裁が起きて、それで独裁政治に移っちゃうということが起きるっていいですか。

その後になると、今度はナポレオンが出てきて国民投票によって皇帝になる、それもまた強い中央権力を残しているために、その強い中央権力を動かすに相応しい人を選挙で選ぶ、それが人気のあったナポレオンだったということでもあるわけです。ですから、王政から共和制に移行したのはフランス革命ですが、その後もまた王政に戻ったりもしていますけれど、歴史の流れとしては確かに共和制に向かったと。けれども、中央権力の独裁体制は依然として変わらなかったというんです。

つまり、フランス革命がもし本当の革命であるならば、あの時点で中央権力っていうのはどういう権力を持っているのか、あるいは持つてはいけないのかという、その問題の検討をやらなければ



いけなかった。しかし、近代革命は何処の国でも結局それをやってない。だから、中央独裁という形がその後も持続してしまったということなのです。そうすると、今度は権力を取ってしまえばいいということになるわけで、つまり、権力を取ってしまえば膨大な権力になりますから、なんでも好きなことができる、その結果として権力を取るためのいろんな手法が蔓延してしまうと。それが今、世間ではポピュリズムなんて言葉がよく使われているのですが、トランプにしても安倍もそうですけど、ポピュリズムの政治がはびこっているみたいなことを、よくマスコミなんかに言われるっていいですか。あれ用法としては間違っているんですね。ポピュリズムっていうのは大衆芸能ですから、後先を考えず大衆が求めているものを作るってことなのです。

僕もつい数日前に今年の税金の申告に行ってきたんですけど、当然ながら納税者としては税金なんか払いたくないわけで、しかし申告しないと後でえらいことになるんで、しょうがないからやっています。そうすると、やっぱり多くの人からすれば税金なんか払いたくないし、少なければ少ないほどいいという、じゃあ、そこに迎合して大きな減税をしていく。これがポピュリズムなわけです。だから、その結果として最終的には財政が破綻したりしているのです。その時の大衆が求めるものに従って、それに関心をかけていくという。

ポピュリズムではなく デマゴグの政治

だけど今やっているのはそれじゃなくて、明らかに大衆を扇動して権力を取るというやり方なわけで、今の安倍政権でもそうですけど、北朝鮮が何かやるたびに安倍政権支持率が上がるという、これも一つの扇動なわけで本当にそこだけ取ると北朝鮮と安倍政権って密約があるんじゃないかというぐらいあそこは密接な支持率の関係ができるんです。だから、それもまた北朝鮮の脅威とか、中国の脅威とか、本当に脅威が有るか無いかは別問題として、絶えずそこら辺を扇動しながら自分

達の支持を得ているとか、今度はちょっと扇動を失敗しちゃった感じですけど働き方改革とかいうわけです。あれも一つの扇動で絶えず繰り返し繰り返し、国会が開かれるたびに今度の国会は何とか国会だとかいう話が出てきて、そこでまた扇動が続く。

結局これは扇動政治家っていうギリシャ以来の手法で、デマゴグの政治というふうに歴史的には言われてきたわけです。だから今、世界にはびこっているのはポピュリズムではなくてデマゴグの政治なのです。それが有効なのは今言ったように強大な権力を握ることができるという、だからそのためにはどういう扇動をしていったらいいか、その手法だけが政治になってしまう、そういうのが今の状況を作ってしまった。そうすると、この状況を作ってしまった原因というのは、近代革命のやり方にあったというふういってもよくて、さっき言ったように中央権力が一番強い時のあの独裁的権力をそのまま継続させちゃったと。あそこに失敗があったというふうにいってもいいです。

本来からいうと政治的な権力というのは、末端が全部持つべきなんです。今の市町村でいいのかという話はあるかもしれませんが。特に広域合併した後の市町村というのは、全権全ての政治権力は市町村が持つべきです。

ただしそうすると、そこから市町村としては市町村だけではやれないことっていうのが当然出てきます。それは、例えば交通法規を決めるという時に市町村ごとに交通法規が違ったりとか、これは僕らも危なくてしょうがない。そうすると、市町村の意見として交通法規は市町村だけで作るわけにいかないと。だから、この権利を県に委託する。だけど委託された県としても、やっぱり交通法規、県境が変わるたびに変わるんじゃない困っちゃいます。これは県としてもやりきれないので、交通法規を作る権利は国に委託しますと。だから最終的には国が作るんだけど、ただそれは末端市町村ではこの問題はやりきれない、だからもっと広いところに委託していきますということなんで、委託を受けている以上は委託した人達の考え方を、やっぱりある程度尊重してやらなければいけないし、委託した側は自分達の委託である以上は、ちゃんと

したものを作ってくれるのかどうかをきちんと監視するという、そういうものでなければいけない。

国がやらざるを得ないものはいっぱいあるわけです。例えば外交とか防衛とかいうことになってくると、市町村で外交とか防衛やるわけにもいきませんから、最終的には国がやることになる。だけど、そういうものもいっぺん市町村が持っているということを前提にして、市町村から県へ、県から国へと委託するという、委託してくれた人達の考え方を尊重しながらやるという意味です。国が勝手に何でもやっていいという話ではない、やっぱり本来からすると権力の在り方って、そういう小さいところが全権を持つべきです。

というのは、小さいところが持っていれば住民の監視も効くし、その点でいうと今の合併市町村でいいのかっていう問題は逆に問われることにはなるわけです。人々の監視が効くぐらいの単位のところは全権を持って、それで自分達のとこだけでやるのはちょっと無理があるっていうものを、上に上にと委託していくと。それが本来の権力の在り方だっという気がするのですが、残念ながら近代革命とはそういう方向性に行かなかったと。それで中央権力の絶対性だけを維持してしまったり、フランス革命なんかについても輝ける革命じゃなくて、かなり失敗作の革命という、そういう捉え方をしてもいいはずだっというわけです。

近代の理念のあるべき姿

そういう失敗があったから、結局自由・平等・友愛とか、あるいは民主主義とかいった近代の理念というのは、強大な国家制度の基に呑みこまれてしまっていて、本来から言うと、例えば少数者の権利を尊重するとかいうようなものを、基準は国が作るっていうのは本来おかしいわけで、いろんな地域の中にはいろんな少数者がいる。そうしたらその人達をどう尊重して、どういう関係を作っていくのかというのは、法律が有ろうが無かろうが関わらず、そこで生きている人達がちゃんとした関係を作って尊重してやっていかなければいけないわけです。そうするとその人達がきちん

と考えて一つのルールを決めていくと。そういうルールを尊重して、国が「じゃあ、こういう法律を国全体としても作りましょう」ということだったらそれでいいわけです。

それも下から委託していく、自分達の地域はちゃんとやるけれど、それを社会全体に広げていくためには、まず県に「作ってね」と委託をして、しかし県としてもそれを日本全体に広げていくためには国に「こういうものを作ってね」と委託するんです。それは委託されたのだから責任をもって作るべきです。本来はそういうふうでなければいけないんです。それを絶対権力を国の方が持っているもんだから、今の選択的夫婦別姓とかいうあの話だけでも国が駄目といったら駄目みたいな話になっちゃっています。そんなもん自分で勝手にやらせればいいわけで、それこそ市町村でうちの市町村はいいよと。そういう区が広がっていけば県もいいよと、で、県にそういう動きが広がっていけば、国はそれを尊重するしかないという感じでそういう法律を作るとかです。それで本来いいんです。それを本当に昭和を懐かしんでるようなおじさん達が夫婦別姓を認めたならば日本の家族制度は壊れるとか、ああいうことが未だに通用してしまう。だから、そんなことまで国が絶対的な権力を持っているというこの構造の方が問題です。

そういう構造だから近代社会の理念も民主主義も含めて全て結局国の構造の中に呑みこまれてしまったと。そういうことを考えることなく日本の場合には戦後に今度は焼け野原からの回復ということもあって、それで経済至上主義みたいな感じでいき、その経済至上主義も上手くいなくなってきた。しかし大国になりたいみたいな野望だけは持っているという、そんな状況に今なっているという感じがします。だから、よく考えてみると近代から始まったいろんな仕組みにもうガタがきているし、何となく壊れてるっていう、そういう中で近代からの続いた仕組みに固執してる人達もいます。

本当にちょっと、あんまり言いにくいんですけども、僕は哲学が専門ですので、今現代哲学をやっている人達でも多分半分以上の人達は、人権と

いう考え方には同意してないんです。つまり人権というのは、人間は生まれながらにして個人のこういう権利を持っているという話になるんです。

実はあの発想っていうのはキリスト社会が作った発想なんです。キリスト教社会では、人間は神が創ったわけです。ですから、神は人間に対してこのような権利を与えたという話なんです。ただし、その権利は神を信ずる人間にしか与えられないと。だから異教徒には与えられないということなんです。その代わり個人に神はこういう権利を与えたけれど、その権利を手にしたんだったら義務を果たさなければいけないと。その義務っていうのはキリスト教徒としての義務ってことになるわけです。それは神の敬意を高めていくということにもなっていくわけです。神の威厳をというか、高め続けるとそういう生き方をするっていうことを義務としてその代わりに私達は権利を得たという、それがヨーロッパの中世社会の中で成立した義務と権利の関係なのです。

国家が決める義務と権利

それが近代になると、キリスト教を外すことになったと。つまり社会と宗教は繋がらないってことになったわけで、だから宗教は個人の自由で選択してくださいと。社会理念の中に特定宗教が入ってくるのは駄目ですというのが近代の考え方なわけです。

けれども、実は権利と義務の関係はその後やっぱり踏襲されたわけです。だから、今度は人間は生まれながらにして権利を持っているという話になったわけです。ところが権利を持っている以上は義務を果たさなければいけないということになって、じゃあ人間はどういう義務を果たさなければいけないのかと。今度はキリスト教が勝手に決めることはできなくなったので、権利と義務の関係まで国家が決めるということになっちゃったわけです。人間がどういう権利を持っているのかを国家が決めると、時代によってその権利内容は変わっていくわけで、例えば最近になってようやく性的マイノリティーの権利とかいうようなことも

言われるようになったけど、ちょっと前までだったらそんなもの無視ということになります。

しかも国家が決めているものだから、国民の義務の第一位はなんと納税の義務なんです。納税しないものは国家が認めている権利を得ることができないという、実際に今、制度上そうなっていて場合によったら国税を払わなくてもいいですけど、地方税を払わないっていうことになると、子どもを学校に入れる権利も無いってことになっちゃう。

だから、収入が無いってことになったら、収入が無いという申告をちゃんとやって、それで「税金を払わなくてもいいですよ」というある意味で国家の許可を得ます。その許可を得れば市民権はありますけど、勝手に税金を納めないということになると様々な権利が無くなってしまいます。だから、これも実に不思議な話なんですけども、結局国が権利というものを決めてから、国民の第一の義務は納税であるという話になってしまうわけです。納税でもいいですけど、ただこういうことを国が決めているっていうのはおかしいですね。

人間の権利とは何かとか、人間の義務とは何かということ国が勝手に決めているのは実におかしい。それはキリスト教社会が神の名において決めていたものを、今度は社会の名において決めるに変えただけなんです。ところが社会の名においてという時に、さっきから言っているように強大な中央権力が存在したと。結局そういうことまで強大な中央権力が呑みこんでしまう、国家が自由に決められるみたいなそういう仕組みにもっていったっちゃったということです。

だから、そういうのをいろいろ考えますと、やっぱり近代革命っていかにも失敗策であったということにもなるし、それからさっき言いかけたように哲学をやっている人間からすると、権利っていうのは個人の権利なのかということを実は相当批判的に見えています。権利っていうのは関係の中で発生するものなので、簡単に言えば「おい、お前バカだなあ」という言葉を使っている種の間では別に何の問題にもならない。お互いに信頼関係があるような関係の中で、そういう言葉が使われたとしても、別にそれは問題にはならない。だけど別の関係の中で「おい、お前バカ

だなあ」と言ったら今はパワハラって言われます。それはある種の関係の中では明らかに相手を傷つける発言になってしまいます。そうすると、それはこの言葉がいけないという問題じゃなくて、本来から言うかどうかという関係がそこに出来上がっているかの問題で、ある種の関係の中では絶対にいけないものになるし、ある種の関係の中では場合によったら許容される。いろんな関係の中で私達はお互いの権利を守りあっているっていいですか。あるいは個人をも尊重し合っています。

個人を尊重するというのは、そういう制度を作ればいいって問題ではなくて、どういう関係を作ったって尊重し合える社会が作れるのかって、関係の在り方の問題というふうに僕は考えています。

それを個人の権利みたいにもっていっちゃうと、結局個人の権利とは何かというのを、また中央権力が決めるみたいな、そういう近代の落とし穴みたいなところにはまってしまう。こう思ってるんですけど、ただそれを「言いにくい」と言ったのは、にもかかわらず人権無視みたいなことがまだ今、社会の中であるから、そういう現象に対しては「やっぱり人権は大事にしましょうと、尊重しましょう」と、僕らも言わざるを得ない。やっぱり根源的にはこの発想自体が実は限界を作っているのではないわけです。そこではある意味では本当に二枚舌みたいなもんですけど、人権が無視されている現場みたいなところに対しては、「人権を尊重しろ」と、やっぱり僕らも言うんです。そうなんですけど、もうちょっと近代以降の思想というのを考え直してみようという場面では人権という個人の権利にもっていっちゃうと、僕は「何か泥沼にはまるんだよね」と言うのです。

むしろ、その私達はどういう関係を作ったらいいいのかと、どういう関係こそがお互いを尊重し合える関係になるのかという、そっちの議論をきちっとやらないと、結局また中央権力に持っていかれるみたいな、あの泥沼にはまるって、だからそこでは矛盾したことを同時に言うみたいな今の私の分野の立場です。

終わりつつある時代を どう引き受けるか

だから、そういうことを言わざるを得ないのは、いろんな社会の不正に対しては、やっぱり今迄の六法で言わざるを得ないということもたくさんあるんだけど、でも大きな歴史としては一つの時代が終わりつつあると。そういう終わりつつある時代をこれから我々はどういうふう引き受けていくのかって、それが問われてる時代。近代以降の時代が今や終わりつつあると。そこに対してどういう引き受け方をしていったらいいのかという、それが問われています。それがもう少し短い時間で言うと、昭和という時代が二度目の失脚をしているという、そういう時代に対してどういうふう引き受けていくのかと、そういうことを考えていく時代になるだろうという気がします。

結局考えたら天皇制というのも明治という近代が作ったものです。そうすると、近代っていうのは歴史の生命力を失っていくみたいな時代が始まってくると、少なくとも近代天皇制もまた問われてきます。昭和の時代に象徴天皇制としていこうとした天皇制の在り方も昭和が終わってみるとだんだん問われてきます。だからそういうものが、昔のような意味で例えば反天皇制とかそういう感じじゃなくて、なんかどうでもいいよねという感じにだんだんなってしまいます。そういうことがこれからいろんな形で起きるだろうなあっていいですか、まあそんな気がしています。

そうするとオリンピックなんか本当にどうでもいいんです。東京にだって、幻想であれなんであれ何かオリンピックが無いことによって東京が変わるとか何にもないわけです。むしろ、ホテルなんかもこれからはまだできてくるでしょうけど、ホテルができてのもオリンピックのためじゃなくて、今、外国人観光客が多いからです。そのためにホテル不足になっている。だから一面では今が建てるチャンスという業界が存在するというだけの話です。実際、今、僕の場合には東京に家があるから東京のホテルは関係ありませんけど、大

阪とか京都でホテル探すのもうんざりする、もう値段が高くってたまらんといい、そういう時代なんで、だから建っているだけの話っていいですか。そこではやっぱり昭和的な企業の発展を目指していくホテル業界は作っていくと、意外と崩れていくのも早いだろうという気がします。つまり、昭和の業界感覚で作っていったらいいわけですか。多分長期にわたって上手くはいかないと思います。

個別企業の名前を挙げていろいろ言うのはあれなんですけど、例えば星野リゾートとかもそうですけども、大丈夫なんですかねと思っている人はたくさんいます。特にアメリカのファンドマネーに入れて資本増強するような格好でいくと、アメリカのファンドマネーっていうのは、長期的なことには対応してくれません。毎年利益を上げにいかないと、毎年高配当を出していかないとすぐに逃げます。そうすると、かなり大変なんじゃないですかねと感じにどうしても思います。まあ、そう思っている人はいっぱいいると。もちろん、そ

れを上手く星野さんは抜け切るかもしれませんが。ですから結局こういうのも、やっぱりどこか昭和の経営者なんです。だけどそれは、確かに外国人観光客も増えているし、今のところは何とかなっているでしょうけど、何かの菌車が狂い始めたらいっぱい参ってしまうということが起きるかもしれません。だから、本当はもう昭和的発想で新しいことをやろうというのは危ない時代にきてるんだけど、唯一今、オリンピックに向かって乗ってる人達がいるとすれば、そういう人達ぐらいです。

多分大きな意味では天皇が代わろうが、オリンピックがあろうが何も変わらないでしょう。ただ、そういう中で静かに変わっていくのは、私達の一つの時代の終わりを迎えているという、そういう感覚だけは静かに広がっているという、まあそんな感じじゃないかと僕自身は思っています。

ということでお話を終わります。

.....

(司会)

内山先生、ありがとうございます。私は昭和36年生まれでして、今日はほとんど多くのみなさんが昭和生まれの方だと思います。昭和の価値あるいはシステム、いろいろ考えさせられる内容だったというふうに思います。せっかくの機会ですので質問を受け付けたいと思います。質問なりご自分のご意見でも結構ですけども、ご発言いただいたらと思います。いかがでしょうか。最初にお名前をおっしゃってからお願いします。

(会場)

高知県職連合の門脇といいます。高知県庁は今、経済政策として地産外商であったり、県内で言いますと少子高齢化の中で福祉に関して力を入れています。特に看板政策としていますのが産業振興政策、ちなみに企業の方々と連携をしたり、場合によっては企業側人達とタイアップして販売計画をたてさせたりしています。外に向かってどういうふうやっていく、売っていくかという、そういうことを通じてどういう信頼が身に付くか、



できるだけモーションを掛けて、そこで地域の雇用をたくさん集めて、そういったことを必死でやっている。県職員も大変な思いをしてるんですけど。その行き着く先といいますか、何か発展しそうな気がしないんですね。途中で息切れして、ついでしてしまうんじゃないかと、個人的には感じてるんです。ただ、そういう方に対してどう見たらいいのかということをご助言いただけましたらあ

りがたいなと思います。

(内山氏)

大体、今、何処の県でも同じようなことをやっていますんで、何処でもやってるようなことをやっても大体失敗します。それもだから、末端って言葉を使えば末端が持続できればそれでいいわけです。末端っていうのはいろいろあって、一つは地域ってことです。それぞれの地域が持続するにはどうしたらいいのかと。強さっていうのは持続なので、強さっていうのは数字でもないし何でもない。持続できればそれは強さっていう。そうすると、それぞれの地域が持続するためには、どういう仕組みを作ったらいいかというのを考えるっていうのは基本だし、それは場合によったら市町村が持続しようとしたらどうしたらいいかと。

ただ、市町村でも今の市町村はほとんどの場合大きすぎるんです。私の村は1,250人ぐらいの村なので、役場職員さんが全員の顔と名前を知っているっていう広さなんです。こうなってくると、もの凄く有利なことがいっぱいあります。雇用場所を作るといふ発想よりも、あの人達が村に帰ってこようとしているから、その人達の働く場所をどう作っていったらいいかとかです。その人が、じゃあ今迄どういう仕事をしてきたのかとか、どういう勉強をしてきたのかとか、あるいは、そもそもその人の家はどういう家だったのかとかみんな知っているわけですから。そうすると、どういう仕事を作ったら喜んでくれるんじゃないかとい



うことが分かってくるわけです。そういう単位でどうやったら持続できる村を作るかっていうことを考えています。

つまり、もう一つの末端単位というのは、例えばそれが造り酒屋さんだったりとか、県内の企業みたいなものなわけです。その酒屋さんを含めた企業といいますか。そうしたら今度は、それがどうやったら持続できるかと。その場合に今ですと、造り酒屋さんは残ってもその交流をしている町の酒屋さんは潰れていくとか、その酒の購入先がむしろ量販店に代わっていくとか、そういう地域もあったりする。そうすると、それで本当に持続できるのか、だから量販店が良いか悪いかって話じゃなくてすぐに持続の問題と。また、じゃあ量販店っていう仕組みは持続する仕組みなのか、持続する形で量販店があるんだったのであれば別にそれはそれでいいでしょということなんですけど。持続についての約束をしない量販店っていうのは、果たして良いのかどうかっていうことでもあるわけで、全て持続するにはどうしたらいいかと。

例えば三越というデパートは、発祥は越後屋さんという日本橋の着物を売ったところなんです。着物の生地を売ったところなんです。あれは当時の大量販店だったわけです。それまでというのは、着物の販売というのは反物を持って店の人がお客さんの家に行って、それで「こういうのがあるけどどうですか」という形で売っていくっていう売り方だった。しかも代金の支払いは掛売りで、「じゃあ、年末に払いましょう」とか、そういう形でやっていた。それが越後屋さんは店頭販売現金のみ、そのかわり値段は安くするかわりに掛売りはできないという、大量販店を造って実際には大ひんしゆくをかった。しかし結果としては伸びてしまった。それが後の三越になっていくわけなんですけど、今のデパート業界さんってかなり厳しくなっています。だけど、少なくとも越後屋さんができてから200年以上は持続したというふうに言ってもいいわけで、それはそれで量販店だけでいいんじゃないですかっていう言い方はできると思います。

ただ、持続を考えていく時の単位というのは、県が単位を考えたって意味が無いわけで、それぞれの地域の持続の仕組みをといるのを考える仕事

だし、それぞれの企業とか産業とか、あるいは町の商店街も含めてそれを持続させるにはどうしたらよいかっていう、そういうことを考えていくべきで産業政策じゃないのです。そこを多くの人達に、行政関係の特にトップの人達が間違えている気がするんです。

持続しない産業ももちろんある程度はできていくんだけど、社会で持続させるためには持続する産業が必要であるという、ある意味持続する地域が必要になる、だから僕は行政って持続だけを考えればいいという気がするし、そうすると持続を考えていく単位は何処なのかっていうことを考えてもらわないとって気がするんです。

これは産業というほどのものじゃないですけど、うちの村でペレットを作るようになった、そうしたら今はペレットが売れますのでいろんな販売業者さんとかやってきて、中には国会議員も来ましたけれども、「私が仲介して売り先を斡旋しましょう」という、そういう人もいました。いろんなところが「売ってくれ」って来た。「これは自分達の地域内資源です。だから地域内では売りますけれど地域外に売る予定はありません」って言うんです。生産量ってというのは、地域内で上手く循環できる量で作ってるので、それを外に持って行って売っちゃって地域の中の人には灯油を使っているんじゃない本末転倒です。地域外に売る物も作りますというわけです。例えば、うちの村だとキノコはかなり作ってますので、キノコはうちの村では絶対消費できません、99%以上外に売ってます、これは地域の維持のために外貨を稼ぐということでもあるわけですけども。でもこれはもう売れませんと。自分達の地域内の循環システムを作るんです。そういうものもはっきりさせていってま

す。

地域維持のために何を循環させて、何は外に向かって売っていくかってことを明確にしてるってことなんです。何でも売るものを作ればいいってもんでもないと。またトマトとかもの凄い高いですよ。ただ日本中で作っちゃってるんで、今度は消費者に近い所が有利みたいな話になってくるとかいろいろ起きかねない。今のところはトマトって経済的にはうまくいっています。別に辞



めるとは言いませんけど、相当おっかなびっくりやってくるものに、もうなっているんじゃないかなって気がしますけど。

(司会)

よろしいでしょうか。他にありませんでしょうか。

ないようでしたらしたら私からの質問です。昭和的なものが失脚しているということで、それは私自身言われるみたいにも感じることもあるんですけども、昭和が終わってもう30年経過しているわけで、その30年というところの意味といいますか、あるいは平成的なものの定義というものもまた先になってしまうか、平成といたらこれから見えてくるようなところはどうなんでしょうか。あるいは、平成はどういう意味があったのかということももう少し先にならないと分からない、そういうことなんでしょうか。

(内山氏)

平成時代っていうのは、昭和というろうそくの火が何かこうだんだん小さくなっていくというそういうことなんだけど、ある人達はもう一回あおいで火をもういっぺん大きくしようと努力している。ある人達はもうこの火からは離れようという、そういうことをしているっていう、昭和が崩れていくようなものが見え始めた時代っていいですか。多分、平成ってそういう時代でしかないんじゃないかって気がします。平成という新しい時代を作ったという感じではないんだろうといいですか。

私がそういうことを考え始めたきっかけは、来年また新しい元号が出るんでしょうけど、私は昭和25年の生まれですが、次の元号ができると私は子どもの頃感じていた明治の人になってしまう、それで次の天皇がもし長持ちしなくて、また元号が変わる何てことが起きると、江戸時代の人間になってしまうんじゃないか、だからこれぐらい世の中、実はそこで生きてきた人間たちは連続性があるように感じているから、あんまり変動があったと思わないけど、もしかすると私の発想は私の子どもの頃の、つまり今の若い人達から見ると、明治の人間の発想というふうに見える可能性があるといえます。もしかすると、いろんなものが変わり始めているのかもしれないという思いから、あらためて振り返ってみるとやっぱり昭和ってというのは、二度目の失脚を迎えてきたという感じがする。平成という時代は新しいものを作らなかった。良い悪い別にして戦後の昭和って新しいものを作ったんです。東京オリンピックか何かに集約されていくような一つの時代を創ったっていう言い方はできると言えます。だけど、平成はそういうものを創らなかった。ただ、それが崩れていく過程の中で、非正規雇用が増えていったりとか、あるいは人間の孤立が見えてきたとか、その結果みたいなものだけが見えている。その中で今の政権は強い日本を創るんだっていう、そういう気持ちでしょうけど、率直に話せば憲法の改正に成功したとしても多分強い日本にはならないということであって、昭和の崩れていく時代みたいなものを結局引きずるしかないという感じがするわけです。

今、いろんな意味で世界ってやっぱり今迄の価値観が通用しないわけで、北朝鮮のような小さな経済力もたいしてない国に、アメリカが何ともできないという、そういう時代でもあるわけです。もちろん、アメリカもひょっとすれば2~3カ月

の内には空爆やっているとこういう可能性もあるかもしれないけど、もし仮にそれをやったとしても、それが良い悪いじゃなくてアメリカがまた世界のアメリカに戻ってくるってことはもう無いという、何をやらかしたのかと言われて終わります。もちろん、空爆なんかやると日本なんかは相当の被害を受ける可能性ありますけど。だから結局、アメリカが世界の威信が回復するとか、そういう代物ではもうない。トランプがとち狂ったぐらいの評価にしかならないということなわけです。結局いよいよ北朝鮮に手玉に取られているという、そういう感じでもあるわけで。だから、大国が大国でなくなっちゃったということでもあります。

逆に言えば北朝鮮が原爆を持った結果として、いよいよ原爆が使えない武器になってしまったという言い方もできるわけです。絶対使わないという保証があるって言うわけじゃないのですが、原爆を北朝鮮が使えばそれは恐らく北朝鮮崩壊だというふうになる。だから、結局原爆は持つことはできるけど使うことはできないという、そういうものとしてはっきりしていく。だから結局使えたのは広島と長崎だけという、そういうことはいよいよなりかねない、だからいいとは全然言いませんけれども。言わないけれども、原爆を武器にして世界に発言力を作るみたいなそういう時代もまた終わっています。それもまた世界規模で見る時の昭和みたいなもので、そういうものも何か終わっていくことです。こういう中でこれから国際関係も新しく考えていかなければいけないということなわけです。その時にアメリカの人は、まさに昭和の発想みたいな感じで「向こうが持つならこっちも持つぞ」みたいな感じで、そこで「抑え込むんだ」とかいきがついているわけだけど、それがいかにも漫画的に見えてしまう、そういう時代でもあるわけです。なので平成ってそんな時代だったんじゃないかなって気がしています。